

「初深雪」の謡と『五音』(上)

竹 本 幹 夫

観世宗家に世阿弥自筆能本が現存する女体神能(布留)は、同じく観世宗家蔵の世阿弥自筆本「松浦之能」「阿古屋松之能」と共に、応永三十四年(一四二七)十月から翌年二月にかけて、世阿弥から弟四郎又は甥の元重に相伝された由緒ある曲であるが、室町後期にはすべて廃曲となって現在に及んでいない。この(布留)は、世阿弥の音曲伝書『五音』上に、

初深雪布留ノ高橋見渡セバ 亡父作書と記される点から、観阿弥作の能と考えられたこともあったが、『五音』の資料的性格や世阿弥自筆能本の存在、又、そこに詳細な節付が施され、しかも完成された二場物の夢幻能の様式を備えることなどから、観阿弥作詞の独立の謡物を借用した世阿弥の新作曲と考えるのが、現在の定説となっている。『申楽談儀』第十五条に本曲の作法につき、「布留の能に、僧・女、布を洗ふ問答より、順路ならば、布留の劍の謂れを謡ふべきを、『初深雪、布留の高橋』と謡ふこと、遠見を本にす

るゆへ也。……『初深雪』と謡ひぬれば、やがて布留が出て来て能に成也」とあるのも、自作の能についての世阿弥の口吻を伝えたものということになる。本条で多用される作詞を意味する「書く」が、(布留)については用いられず、すべて「謡ふ」であるのは、話題の中心である「初深雪」の謡が、観阿弥の謡物よりの借用であったことと関連しよう。

ここで問題になるのは、『五音』上の「布留」の項が、『五音』の中でも異例中の異例ともいふべき書式になっていることである。まず、ここに作詞者を記すことが『五音』上では唯一の例に属する上に、作詞者を記して作曲者を記さぬのは『五音』上下を通じてのみであり、しかもその作詞者注記は、曲名の下ではなく、引用句の後に置かれているのである。これを文字通り解せば、観阿弥作詞にして世阿弥作曲というきわめて珍しいコンビの実例となり、その作詞者注記の位置は或はこうした事情とも関連する特例かとの期待も生ずる。こうした珍解釈が可能かどうかは

(布留)の該部分の検討次第であろう。

ハツミユキ、フルノタカハシミワタセハ、  
チカイカケテヤカミノナノ、  
フルノニタテル、ミワノ、カミスキトヨ  
ミシモ、ソノシルシミエテヲモシロヤ。  
カヤウニ、ナカメセハサナキタニ、サモ  
クレヤスキフユノ日ノ、ケウノ、ホソヤ  
ノニアラサレト(原、ネトモを墨滅)、  
ワレモミノハタバリワ、ナキアサキヌノ  
イトナミヲ、カケソエテアラワン、イト  
ナミヲカケテ(原、カ□チを墨滅)アラワ  
ン。

(世阿弥自筆本(布留)。句読点筆者)

右で傍線を引いたのは、後人によるなぞり書きか、世阿弥が原文を抹消して訂正したのか、判断のむずかしい部分であるが、本能本全体に散見するなぞり書きの例とは異なり原文は判読不能なものも字数や字形が相違するように思われ、原文とは別の文字を上書した可能性大である。多分は世阿弥自身の訂正であろう。この謡は「ヲモシロヤ」で前後に分かれる二節型上歌であるが、全体に詳細な節付が施されており、この傾向は、「布留之能」「松浦之能」「阿古屋松之能」三本各々のほぼ一曲全体にわたる傾向とも共通するものである。いずれもこれらの曲が相伝の直前に書き下ろされたものであることを示唆する

現象と考えてよい。又、「初深雪」の謡で注意すべきことは、観阿弥作書とはいふものの、誤写の結果とは思われぬ改訂の形跡や、不確定ながら抹消による本文改変の形跡らしきものが、後半部分に集中的に認められる点である。小部分の字句の改訂程度であれば、たとえ古くから伝存していた謡物であってもなされ得るであろう。しかし、その全体に詳しい節付を施したりするのは、新たに一小段を書き加えた場合に特有の現象であり、先行の謡物の借用の場合は節付の記入を省略するのが世阿弥自筆能本の通例である。ここから考えると、「初深雪」の謡は世阿弥の作曲ということになり、しかも「布留之能」が相伝された応永三十五年二月をそれほどさかのほらぬ頃の作曲としなければなるまい。観阿弥在世中の作曲であったとすれば、改めて同じ節付を書き写すのは無意味であろう。

一方、「初深雪」の謡の内容を見るに、前半は叙景的内容であるのに対し、後半は布を洗う女を主格とする第一人称的な労働歌であることが明らかである。そしてもしもこの謡が独立の謡物であったとすると、何故この様な主人公が登場するのか、説明が困難なのはなかるうか。能《布留》の本説となった布留の明神示現譚がいかにか有名であったとしても何の説明もなく突然に特定の人物が主格と

なるこの謡が、独立の謡物としての必要十分な条件である作品としての完結性を欠いていることに変わりはあるまい。つまり、「初深雪」の謡の構想は、能《布留》のごとく、「僧・女、布を洗ふ問答」の存在を前提として、はじめて成立し得るものであったかと思われる。「初深雪」の謡は、完曲《布留》と一体の関係にあったのではあるまいか。

「初深雪」の謡の節付を見ると、前半の数句には節付がなく、「フルノニタテル」あたりから次第に注記が多くなっていくことがわかる。上歌の冒頭数句の旋律が平板であることは当然ではあるが、後半部に詞章改変の形跡らしきものが集中することや、借用の詞章であれば節付自体が不要であったはずであることなどを参照すると、観阿弥作詞の謡を借用する際に、その後半をほぼ全面的に改作し、それと関連する部分作曲し直したのが現存の「初深雪」の謡であったとの想定が可能であろう。前掲の『談儀』の記事も、謡自体の改作と編曲とを前提とせぬ限り、借用の詞章を例として自作の能の作風・構成を自讃していることになり、文脈上釈然としない。

右のごとき複雑な事情が作詞者名のみ注記するという例外的事例を『五音』上に招来したと考えたいが、これは又『五音』の性格や書式のあり方とも関連する問題であろう。(未完)